

棚尾地区まちづくり事業
平成 26 年 9 月 25 日（木）19 時～
棚尾公民館 3 階

第 39 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

- 1 前回までのテーマに関する参考意見など
棚尾の農業、安専寺と安藤圓秀など

- 2 テーマ 64 「達吉の歌碑」
 - (1) 説明（磯貝国雄）

 - (2) 出席者による補足説明、感想など

- 3 連絡事項・情報交換など
アイパッドによる電子紙芝居「三州瓦・永坂奎兵衛」の視聴

- 4 次回日程
第 40 回 10 月 23 日（木曜日）午後 7 時から「棚尾中学校」
第 41 回 11 月 20 日（木曜日）午後 7 時から「棚尾の塩田」

「達吉の歌碑」

1 要旨

棚尾小学校に建つ達吉の歌碑は「まなびにし 学校あとの 老松の木よ われをし
るらむ おさなきわれを」と刻まれている。達吉の勉強した学校は妙福寺境内にあっ
て校舎の前に松の木があった。晩年、その松を見て懐かしみ詠んだ歌である。

「小原野に 春は来にけり 鶯の 起きよ起きよと 声をかぎりに」 達吉は小原
の地場産業である和紙を母胎とした、文化性の高い裕福な村作りのために奮闘するが、
村人にはなかなか理解されない時代が続いた。小原の和紙工芸家加納俊治氏は、その
達吉の懸命な思いを後世に伝え、功績を讃えるため、歌碑を建立された。

達吉の歌碑は、これらを含め10基ある。それぞれゆかりの地にあって、達吉を偲
ぶ心が込められている。

2 歌碑一覧表

番号	建設年	場所
1	昭和9年	小原 山内裕三（弥市）宅
2	昭和23年	碧南 長田眼科宅
3	昭和35年	小原 東泉寺
4	昭和36年	岡崎 春谷寺
5	昭和37年	瀬戸 栗木義夫（伎茶夫）宅
6	昭和42年	岡崎 東公園
7	昭和44年	碧南 黒柳実宅
8	昭和50年	碧南 棚尾小学校
9	昭和55年	西尾 恵琳寺
10	平成7年	小原 加納俊治宅

3 参考資料

碧南のいしぶみ集 碧南市教育委員会 平成5年1月発行

4 歌碑

(1) 小原 山内裕三（弥市）宅

(場所)

豊田市北大野町 山内裕三宅

(表面)

藤井達吉先生の歌

楮うつ 三拍子こそ 淋しけれ

小原の里の 雪の夕ぐれ

(裏面)

昭和九年上春

鈴木仙五郎 鈴木弥六 山内弥市

高サ 128cm 幅 40cm

(解説) 文献(2)

昭和元年、天皇即位記念の博覧会に、小原村の紙すき業者、山内弥市が出品した三河森下紙が達吉の目にとまった。達吉が少年時代、丈夫な凧紙として親しんだもので、これが、達吉を小原村にひきつける最初のきっかけとなったのである。

昭和7年、達吉は小原村字北大野の山内弥市を訪れ、染色図案用紙として多量に注文してすかせている。二度目の小原入りは小雪のちらつく日であった。山内家のいろいろ端で、紙の原料である表皮をはいだこうぞの原木をくべながら、次の短歌をよんだ。

楮（こうぞ）うつ 三拍子こそ 淋しけれ

小原の里の 雪の夕ぐれ

昭和9年、山内弥市は、同志と図ってこの歌を近くにあった自然石に刻んで歌碑としたが、これを知った達吉は、この素朴な風土にはぐくまれた純朴な里人の心に打たれ、昭和20年春、戦災を避けて疎開しなければならなくなった時、まっ先にこの小原村を思い浮かべたという。達吉と小原村を結んだこの記念すべき歌碑は、現在も山内家の庭に建っている。

小原村へ疎開した達吉は、北大野の鳥屋平（とやがひら）に、光悦の鷹が峰における芸術村の建設を夢みて、いく棟かの建物を建て、敗戦の年には、瀬戸の陶芸作

家も招いて小原総合芸術研究会を発足させている。この会の解散後は、もっぱら戦前からこの地に培ってきた和紙工芸の振興につとめ、昭和27年には、小原工芸会を結成し、各地で作品発表会を開くなど、活発な活動を行った。現在、和紙工芸家として活躍している作家の多くが、この当時の関係者で、達吉が食糧難による栄養失調やら芸術上のゆきづまりやらで小原の山を降り、生まれ故郷の碧南市にもどってから、しばしば指導を受け、通った人たちである。

(2) 碧南 長田眼科宅

(場所)

碧南市源氏町4丁目

(表面)

いのちありて ふたたひとはしと ちかひてし
ふるさとゝひぬ さためとやいはむ 達吉

(解説) 文献(2)

昭和21年達吉は、旧友長田光裕に招かれて、再び踏まぬと決意して出た故郷の土を踏んだ。その感慨を歌集「ふるさと」に託して長田氏に贈っている。これは、小原和紙に松竹梅の下絵を描いた上に歌を書いた巻物で、その巻頭は、

今生に 再ひは訪はしとおもひしを このたひはからすも 光裕大人にめかねさ
ためて 春陽子にともなはれ 二十年ふりに三つの夜の夢を光裕居にむすひぬ そ
のおもひてをつゝりておくる

いのちありて ふたたひとはしと ちかひてし
ふるさとゝひぬ さためとやいはむ

と書き出され、巻末を「昭和21年秋 小原山居達翁」で結ぶ。長田氏は、この書き出しの歌を碑に刻んで自邸に建てている。

この後、昭和23年にも長田邸を訪ね、そして、昭和25年12月に、小原村より碧南市新川道場山へ移る。

(3) 小原 東泉寺

(場所)

豊田市岩下町

(案内板＝表面)

藤井達吉歌碑

紙寸計留 小原山人 波羅可良母 登都九仁尔

太閑羅仁奈礼止 伊乃類奈留

以久世可 佐閑恵弓 散迦恵安礼

奈古也加尔 止母尔 東母尔 須計与閑之

遠婆羅也末非東 佐地遠己所

迦美閑計天 伊乃理万布散牟

奈古也閑尔 多迦良東那連与 迦美須計類

遠婆羅也万悲東 伊久世布留止母 空庵

(ふり仮名)

かみすける おばらやまひと はらからも とつくにに

たからになれと いのるなる

いくよか さかゑて さかゑあれ

なごやかに とともに とともに すけよかし

をばらやまひと さちをこそ

かみかけて いのりまふさむ

なごやかに たからとなれよ かみすける

をばらやまひと いくよふるとも

昭和三十五年一月

鈴木賢により建立

書は藤井達吉

(裏面)

藤井先生昭和廿年二月真鶴より小原村へ疎開 同廿五年碧南市新川町に移らる
其間楮和紙の美術漉込を創始教導せられ遂に土塊草木の色素材を応用して紋様図案
漉込の新機軸を完成せらる 抑く先生はその全生涯を芸術一途に傾注されての創作
は絵画陶芸添工金工染色織布刺繍等の全領域に及ぶ 今や小原美術和紙は世界一な
りと名声を博するに及ぶ 先生の不断の御精進と偉大なる御功績に対して迎敬感謝
に堪へず依て茲に子弟並に有志相謀り先生の自詠直筆の和歌一首を刻し口誦讃嘆敬
慕の微哀を表する

昭和三十五年一月吉日

疎開十五年 和連美や古仁 迦へ羅無須

鈴木賢大人乃 勢川奈留母止面仁 己礼を書久
於母非起や 止都勢牟仁大人逝久 噫

(読み)

疎開十五年 われみやこに かへらむす
鈴木賢大人の せつなるもとめに これを書く
おもひきや とつせむに大人逝く ああ (嘆き)

(解説) 文献(2)

昭和35年1月、親交のあった小原村東泉寺の住職、鈴木賢氏の招きで久しぶりに小原村を訪れ、歌碑建立の企てを聞く。それから間もなく避寒先の幡豆郡の宮崎寮から題詞のついた長歌一篇を書き送ったが、そのすぐ後で鈴木氏の急逝を聞き、さらに題詞に「とつぜんに大人逝く噫」と書き加えられたものが建立された。

(4) 岡崎 春谷寺

(場所)

岡崎市梅園町

(表面)

井の口能 やふ奴ちは羅乃 閑里能以本
有俱非春奈支奴 波類盤来奴天布

(読み)

井の口の やぶぬちはらの かりのいほ
うぐひすなきぬ はるはきぬちょう

空庵

昭和36年6月建立

(解説) 文献(2)など

昭和31年9月岡崎市岩津町井之口の斎藤家に転居、ここで詠まれた歌は、しばらく寓居の縁で、同市梅園町の春谷寺に建てられた。宗偏流茶道師匠近藤宗柏の書である。近藤宗柏は岡崎で達吉の面倒を見た人。

(5) 瀬戸 栗木義夫 (伎茶夫) 氏宅

(場所)

瀬戸市川合町

(表面)

誰賀堂面耳 散九に波あ羅傳 美遅乃閉乃
志己乃之已久佐 左久へ久散支奴

(読み)

たがために さくにはあらで みちのへの
しこのしこくさ さくべくさきぬ

(解説) 聞き書き

彫刻家であるご子息義夫氏（昭和25年生れ）は、この碑が庭に建った昭和37年、父、伎茶夫と達吉がここに立っていたのを覚えていると言ってみえた。

(6) 岡崎市東公園

(場所)

岡崎市欠町

(園内案内板)

この歌碑は、藤井達吉翁（1881～1964）の遺徳を偲び、翁の3回忌にあたる昭和42年8月27日、翁と係わりの深かった人々で作る愛知県総合芸術研究会により建立されました。

碑には、「夢を追ひ 夢をかたりつ 一人みき いほには梅の 樹立ちのもとに」と刻まれています。これは翁の愛した「夢」、「梅」、「月」を詠んだ歌の内から、「梅」に係わるものばかりを集めた「梅百題」（愛知県美術館に寄贈）の60番目の歌で、翁の直筆を彫ったものです。

(表面)

夢を追ひ ゆめをかたりつ ひとりみき
いほには梅の 樹立ちのもとに 達翁

(裏面)

藤井達吉翁歌碑銘

翁は明治十四年六月六日碧海郡棚尾村字源氏に生まる 妻子を有せず 名前を追わず 孤高の道を歩み純粹に芸術を求めて 美術工芸の全般に亘り幾多の名作を生む 特に継色紙は絶品にして翁独特のものである 翁は晩年所蔵の作品を挙げて愛知県文化会館に寄贈された 昭和三十九年八月二十七日岡崎市民病院において永眠

享年八十三歳 一所不住の翁も岡崎市戸崎町東山の家が最期の住所となった 翁の由縁の地岡崎市東公園にこの歌碑を建て後世に伝える 翁の真価はその作品によって歴史が決定することであろう

昭和四十二年八月二十七日

愛知県総合芸術研究会

(解説) 文献(2)

昭和42年、愛知県総合芸術研究会は、岡崎市欠町東公園に、なき達吉をしのいで、梅の歌碑を建立した。

(7) 碧南 黒柳実氏宅

(場所)

碧南市東浦町3丁目

(表面)

あ類止支盤 十方空止 おもへと母
散止里可弥堂留 和連のあわ連散 達

(読み)

あるときは 十方空と おもへとも
さとりかねたる われのあわれさ

(解説)

昭和44年5月に建立。碧南市東浦町3丁目45の黒柳実氏が、達吉からもらった扇型色紙の歌を庭石に刻んだものである。黒柳氏は山中医院の薬剤師をされていた。

(8) 碧南 棚尾小学校

(場所)

碧南市春日町1丁目 棚尾小学校校庭

(表面)

まなびにし 学校あとの 老松の木よ
われをしるらむ おさなきわれを 達吉

(裏面)

藤井達吉先生歌碑銘

先生は明治十四年六月、碧海郡棚尾村字源氏に生まれる。棚尾小学校卒業後貧困の中に苦勞し、純粹に芸術を求め、美術工芸全般にわたり幾多の名作を残された。先生は日本近代工芸の先駆者でもあり、また伝統工芸の育成にも大きな功績を残された。昭和三十九年八月八十三歳で逝去。先生が学ばれた学校は妙福寺境内にあったが、それをなつかしみ詠まれた歌を碑にして、業績を後世に伝える。

昭和五十年三月二十日

碧南市立棚尾小学校長 中根仙吉

(解説)

達吉の勉強した小学校は妙福寺境内にあって校舎の前に松の木があった。晩年、その松を見て懐かしみ詠んだ歌である。

(9) 恵琳寺境内

(場所)

西尾市西小榎道場前

(主碑 表面)

非東の世能 ○非祢○さ美し 久さ万久羅

○久へもし羅○ 計布も果散奴類 達翁

(側碑 読み下し)

ひとのよの たびねはさみし くさまくら

ゆくへもしらず きょうもかさぬる 藤井達吉

(裏面)

藤井達吉翁は碧南市源氏の出身にして孤高の芸術家として高名を馳せたが当寺三代目坊守及び四代目兼務住職田中靈観とは翁の母方の婚戚として親交深かりしが偶々当寺本堂が昭和二十年の三河震災によって大破したところ深くこれを遺憾とし因縁ある寺としてその復興を熱望し資産の一助にせんがため自作の書画多数を寄贈せられその恩顧を蒙ること尠なからず於てここに翁の徳を謝し歌碑を建て由来を記す因みに翁は昭和三十九年八月二十七日八十三歳を以て岡崎市に於て寂す

昭和五十五年八月中陰

恵琳寺第六世 賢護誌す

(解説)

達吉と恵琳寺との関連は、母方の斎藤家と知多郡大野村の婚戚によるものである
ので、「藤井達吉の生涯」山田光春の著作から関連記事を抜粋する。

「達吉の棚尾における少年時代は、小学校を卒業すると同時に終り、その頃の多
くの少年と同じように親元を離れて、知多郡大野村（現常滑市大野）の木綿問屋・
尾白株式会社へ丁稚奉公に出た。彼が、この時、その小さな足を踏み入れた綿糸や
木綿を扱う商売の世界は、父や、母の里が関係していただけでなく、この辺りの人々
にとっては、古くから縁の深い仕事であった。」……、

「達吉が尾白株式会社の丁稚となったのは、そうして綿織物が家内工業から工場
生産に移ろうとしていた時期に当たっていた。綿業地帯のほぼ中央に位置し、規模の
大きい問屋であったその店の主人は、斎藤家と縁続きの人だったとのことであるか
ら、何かと眼をかけてくれたであろうが、当時の丁稚奉公は、そんなことに関係な
い厳しさをもったものであったにちががなく、……」（以下省略）

(10) 小原 加納俊治宅

(場所)

豊田市小原下仁木

(主石碑)

小原野に 春は来にけり 鶯の

起きよ起きよと 声をかぎりに

(側碑 由来記)

昭和二十五年五月二十五日我が国に於いて始めてこの小原村に農村美術館が設
立されました 愛知県知事さんをお迎えして盛大に開館し来観者一同に表歌「小
原野に 春は来にけり 鶯の 起きよ起きよと 声をかぎりに」の一首を贈られ
た 戦後文化の乏しかった村人に対しての警鐘だったといえるでしょう 人文一
万年世界の文化史を見た時この山里で世界に類のない紙芸術が誕生し育ったと云
うことは奇跡としか例えようがありません これを理解し誇りとして地場産業の
母胎として文化性の高い裕福な村作りがしてほしい一念であったと思います

尚こ乃石材は藤井先生の門際にあった物を山内鋼士様の御厚志によって使用さ
せて頂きました

平成七年九月吉日

俊治記

(側碑 反歌)

鶯の 声を聞きつつ 年毎に

花盛りなり 小原山里 俊治

(解説)

「加納俊治氏藤生達吉翁を語る」から抜粋

- この碑は、平成12年に加納氏が建立され、自身の和紙工芸に対する思いを歌われたものである。加納氏は唯一達吉と起居を共にされたお弟子さんで、…… (以下省略)
- 小原農村美術館開館の一日

[石川] 藤井先生は農村美術館というのを建てられたと聞いておりますが。

[加納] 藤井先生は旧小原村を理想的な文化村にしようと、産業の母胎として美術工芸、つまり小原の場合でいえば紙独自の創作指導をされました。そして、これを一同に陳列し多くの人に観ていただくことによって、美に親しみ、美を語り、美を生活することが出来るようにしたい。そして人々の感性を高め、心の交流を広めればと願われたのです。

その殿堂としての美術館建設の実現に向け、物心共に投げ出して力を尽くされました。しかし、笛は吹けども踊らず、嘆かれましたね。

[石川] その当時の小原では、なかなか藤井先生の深遠な考えを理解することができなかったということですね。

[加納] それでも先生は全力で当たり、建設されました。旧小原村永太郎地区の山の中腹に、床の間付きの十畳と八畳の陳列室と六畳の読書室(美術に関する本、千二百冊を寄贈)、二畳の茶室、十五坪程の茅葺きの家を小原村に寄贈されたのです。小さな家でしたが、日本の伝統が巧に生かされ、中に入ると自ずと心の落ち着く造りでした。

[石川] 建物も本までも全部寄贈されたんですか？ それだけでも藤井先生の美術館にかける情熱が伝わってきますね。

[加納] 農村美術館、日本では第一号という誇りをもって看板を掲げ、昭和25年5月25日、開館を迎えました。当時の村長の加藤和一郎さんは、元養蚕の先生で、指導のために国内を広く回られた人でした。県内外に知人も多く、大変博学な人でした。藤井先生の家へも時々話しにいかれ、親しくされていました。

この村長さんの人望でしょうね、愛知県知事の青柳秀夫さんも開館には出席していただき、華を添えていただくことになりました。知事さんの小原入りは初めてのこととか、村内からも三百人程の集りでした。

[石川] それはすごいですねえ、準備も大変だったんじゃないですか？

[加納] 七人となった小原工芸会員は、この日のために全員が鳥屋平に泊まり込み、徹夜、徹夜を一週間続け、草花文様、つるし柿文様等色紙大の作品を三百点あまり制作しました。この作品を見られた藤井先生、いささかご不満の様子で、一点一点に自作の歌を書かれました。私も持っていますが、今見ても贅沢な記念品です。

[石川] この色紙ですか？ 藤井先生直筆で素晴らしいですね。

[加納] 知事さんの車が着くと、あちらこちらから人が集り、狭い美術館の庭を埋め尽くし、下から見上げると美術館を胴上げしているような盛会な開館日となりました。

知事さんと藤井先生との対談は、一時間程でしたが、終始和やかな会話でした。ところが、お別れを挨拶を済まされると、藤井先生は誰とも言葉を交わされず、帰ろうとされました。その様子に気づき私が、「自転車でお送りします」と声をかけると、「いいよ、いいよ。皆さん方を接待しなさい」と、一人で帰られました。

[石川] えっ、それはおかしいですね、なにかあったんですか？

[加納] ええ、思いもかけないことが起ったんです。先生が帰られて二時間程過ぎた頃だったでしょうか、誰が知らせたのか記憶がありませんが、「藤井先生が大変だ。すぐ鳥屋平へ」と、私達はしゃにむに藤井先生の居間に駆けつけました。枕元には医師の本多先生が真剣な顔で見守っておられ、交わす言葉もありませんでした。日も暮れ始めると、本多先生は「尽くすだけのことはしました。後は静かに時を待ってください」と言って帰られました。後は回復を祈り続けるだけでした。午後の九時頃先生は大変苦しい表情をされると、大量の嘔吐をされました。その時は安藤繁和さんと鈴木正さんとで、手際よく処理されました。

[石川] 美術館開館のその日ですから、そりゃあ大変でしたねえ。

[加納]　　そうですよ。その後も先生は昏々と眠り続けられましたが、私達はこの嘔吐によって回復の望みをもちました。午後の十一時頃でした。ぱっと目を開かれると、「君たちここで何しているんだい？」と、不審そうに見回されましたが、納得されたのか、「もういいよ、もういいよ。帰りたまえ」と目をつぶられました。姪の悦子さんは大変心配されている様子で、私も鳥屋平で一夜過ごすことになりました。

[石川]　　そりゃあ悦子さん、心細いでしょうね。

[加納]　　後日しりましたが、先生の机の上には、遺書と思える封書が二十通程と、「小原農村美術館の開館に際して」と縦二十センチ、横一メートル二十七センチの巻紙が置いてありました。そこには心の焦燥を抑えることが出来ず、一気に九十六行からなる小原人に対する至言が書かれてあり、最後に「死に直面して鳥屋平隠し子しるす」と書いてありました。

小原和紙の礎には、藤井達吉という崇高な人の生命を賭けた尊いご縁のあったことを後世に伝えたいと思います。

[石川]　　藤井先生は自らの美術館建設への情熱と、小原人の思いとの温度差を心の中で強く感じておられたでしょうね。

[加納]　　そうでしょうね、一夜明けると、瀬戸の作陶会の方、一宮市から森傳吉さん方が駆けつけられ、平常な先生の顔を見ることが出来ました。季節は農繁期、工芸会の人達の鳥屋平通いもまちまちとなりましたが、小川さんと私は藤井先生の様子を伺いながら通いましたね。

[石川]　　その後の藤井先生の様子はどうだったのでしょうか？

[加納]　　その後は、「厳しく叱る先生」から「静かにアトリエに籠られる先生」に変わられました。寂漠な山間の日々、物創りだから過ごせるのです。

……（以下省略）